

作製した Curved Image が適していた。ステント留置術後では、ステント内部の評価が可能な、Curved Image が、内膜肥厚の評価、内径の測定等によるフォローアップに適していた。DSA に比して分解能の低さや拍動の影響により内径および内膜肥厚は、過小評価されるものの簡便で侵襲も少なく有効な検査法と考えられた。

5 頸部頸動脈病変における超音波検査の有用性 頸動脈ステント内狭窄の経験

川又 浩行

立川総合病院生理検査室

狭窄病変に対する低侵襲治療として当施設でも PTA やステント留置が施行されている。

今回我々はステント留置後の経過観察におけるエコー検査(以下 CAUS) でステント内狭窄と思われる症例を経験した。

症例は 75 歳男性。H13 年 3 月軽度の失語により来院。精査にて左内頸動脈に低～等輝度の偏在性非潰瘍病変による高度狭窄(84%)と診断。PTA 目的にて 5/1 入院。5/9 STENT 留置。

術後 1 ヶ月の CAUS にて STENT 内部に著明な流速変化一般に狭窄直後の血流速測定にてある程度の狭窄が推定可能といわれるが、今回のように最大血流で 1.35m/s と有意な値ではないものの、連続的に測定する事により著明な変化を指摘することができた。非侵襲的に繰り返し行える超音波検査は、治療戦略の検討や術後の経過観察に有用であるが、ピットホール回避の為に超音波特性を十分理解し、多くの方向から病変部を検索する事が必要不可欠である。

今後も長期経過観察し症例を蓄積したい。

6 発熱、蛋白尿、歩行障害を呈し、P-ANCA 陽性であった pachymeningitis の 1 例

登木口 進・永井 雅昭*・宮川 芳一**

新保 俊光**・岡本浩一郎***

伊藤 寿介****

小千谷総合病院神経内科

Dept. of Cellular & Molecular
Medicine, UCSD *

小千谷総合病院内科**

新潟大学医学部放射線科***

新潟大学歯学部歯科放射線科****

肥厚性硬膜炎は硬膜の慢性肥厚性炎症を特徴とする希な疾患と考えられていたが、画像診断学の進歩により生前に容易に発見、診断されることが可能となった。

我々は今回、発熱、歩行障害、腎炎、中耳炎などを呈し、炎症反応と P-ANCA 陽性より顕微鏡的 PN と診断した 74 歳男性を経験した。造影 MRI により左右差のある明らかな硬膜肥厚を認めた。ステロイド投与により硬膜肥厚は消失し、早期診断早期治療の重要性を感じた。

7 口腔に進展し悪性化した再発中頭蓋底髄膜腫を画像経過

堅田 勉・佐々木善彦・原田美樹子

外山三智雄・羽山 和秀・土持 眞

日本歯科大学新潟歯学部歯科放射線学講座

左側頰部から側頭部の範囲に認められた髄膜腫を MR 画像で経過観察を行った。初診時に腫瘍は境界明瞭で内部やや不均一な Gd-DTPA 造影性を示す長径 90mm として認めた。骨シンチでは第 2 相の blood pool image で病変相当部への集積を認めたが、static 画像では異常所見はなく、腫瘍シンチでは病変相当部に鼻腔と同程度の Ga の集積を認めた。以上の所見より左側側頭窩下に発生した非上皮系悪性腫瘍を疑ったが、生検の結果で meningioma の回答を得た。計 4 回行われた手術における全摘出はいずれの時期も困難で、再発と検査・切除を繰り返していました。4 回目の手術での摘出標本で、初診時とは明らかに異なる異形成細胞を認めたため臨床的に悪性髄膜腫と診断し

ました。各時期のMR画像所見から悪性所見の予測を試みたが、画像上の変化が大きく困難であった。同時に本疾患の口腔側での発症は希であり初期診断に苦慮した。

8 下顎骨に発生した骨膜性骨肉腫の1例

小山 純市・伊藤 寿介・林 孝文
新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面放射線学分野

骨原発の悪性腫瘍のおよそ2%を占める骨肉腫は、多発性骨髄腫に次いで多い腫瘍でその多くが長管骨に発生する。表在性骨肉腫はその発生起点の相違により、骨膜性と傍骨性の2つのタイプに分類される。骨膜性骨肉腫の骨肉腫全体に占める割合は2%以下で、発症年齢のピークは10才代で女性に多く発症する傾向がある。一般的な骨膜性骨肉腫の好発部位は下肢の長管骨であり、下顎骨に発生した骨膜性骨肉腫の報告例はほとんどない。骨膜性骨肉腫は骨膜下に発生するため、一般的に皮質骨は無傷で骨髄浸潤は極めて稀である。患者は15才の女性で右側下顎臼歯骨体部の腫脹と拍動痛を主訴に本学を紹介された。初診時のCT所見により骨髄内浸潤を有する骨表在性骨肉腫と診断され、術前MR所見は骨髄内の腫瘍進展範囲を明瞭に描出していた。病理所見により骨膜性骨肉腫と診断されたが、病変に接する頬側皮質骨は無傷で歯根膜腔経由での骨髄内浸潤が確認された。本症例は骨膜性骨肉腫では極めて稀な骨髄内浸潤を有する症例であったが、長管骨の骨膜性骨肉腫では稀な骨髄内浸潤が、歯根膜を有する下顎骨の特殊性によって容易になることが示唆された。

9 耳下腺腫脹をきたした耳下腺気腫の1例

岡本浩一郎・古澤 哲哉・奥泉 譲
酒井 邦夫・伊藤 寿介*・登木口 進**
新潟大学医学部放射線科
同 歯学部放射線科*
小千谷総合病院**

耳下腺気腫は耳下腺(管)に空気を認めるまれな疾患である。今回我々は3年前にも1日で消失した左耳下腺部腫脹の既往のある74歳男性に耳下腺気腫を認めたのでCT所見等につき報告する。患者は左耳下腺部の腫脹・違和感を主訴に来院。CTで軽度濃度上昇を示す左耳下腺内に小さなガスを数カ所認め、拡張した耳下腺管にはガスが充満し開口部付近は球状に拡張していた。抗菌剤投与により数日で症状は消失した。耳下腺気腫は頬を膨らませて口腔内圧を上昇させた場合に一側性または両側性に発生することが知られている。多くは数日で自然に消失するが、皮下気腫を生じたり、再発し二次的に慢性耳下腺炎や唾石をきたすことがある。CT診断上はガス産生性耳下腺炎と誤診しないことが重要である。

II. 特別講演

「顎関節の画像診断」

— MRIとCTを中心に—

新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面放射線学分野助教授

林 孝文